

台湾人学習者における「て」形接続の誤用例分析

—「原因・理由」の用法の誤用を焦点として—

吉田 妙子

要 旨

「て」形は、複文を作る時に接続の手段の一つとして用いられる。その基本の機能は「文の中止」であり、基本の意味は「継起」であるが、文の前項・後項の関係や文脈の微妙な変化によって意味の連続が起こる。「て」に特定の機能を課そうとすれば、非常に制約が多くなる。にもかかわらず「て」はより意味と機能のはっきりした他の接続語に比べて、安易な接続手段として使われるようである。これは、「て」は比較的初期に学習するため、適当な接続語を思いつかない時にとびつきやすい「簡便性」のためと思われる。本稿は、「て」に課された機能のうち最も制約が複雑で「て」の様々な契機を含む「原因・理由」に焦点を当て、4大学の作文500余例の誤用例分析をもとに台湾人学習者の誤用の過程を考察し、またそのような「て」をどのように有効に使うか考える。

【キーワード】 「て」の意味連続性、「て」の簡便性、意志的動作・無意志的動作、結果の受け手の視点、前項事象の原因性

1. はじめに

「て」形学習を始めた学習者に、よく「て」の意味を聞かれる。「た」や「ない」と違って、「て」は形が作れてもそれが直接意味と結びつかず、後にいろいろな語を接続して初めて文型やまとまった意味ができるものだからである。その一方で「て」形は初級の早い時期に学習するので比較的口に慣れており、その簡便さ故に接続の方便として安易に用いられる傾向がある。

(1)先生はこの問題を私に教て、いいですか。

(老師，請教我這個問題，好嗎？)

学生と話していて頻繁に現われるこの例は、「先生、この問題を私に教てください」とするべきところを、簡便な「て」にとびついたら後の「く

ださい」の文型を忘れてしまい、中国語の「好不好」「好嗎」にあたる「いいですか」で代用してしまった例である。次の誤用はもっと深刻である。

(2)人生の不満が多くて感情が細かい人は改善ができなくて、死後の世界を信じて、人間は再び生まれ変わってくると、今生は早く終わられて、来生の新しい生活を求める。(B「死生観」)

まさに、不定の「て」の意味をよくつかまず、また文型の未習熟・構文能力の不足から「て」の簡便性にとびついて濫用してしまった例である。3-1で述べるb(b)「㊦不要な接続」の誤りが資料2(96ページ)で高い比率を占めているのも、「て」がいかに接続の便宜として用いられやすいかを示すものであろう。

本稿は、台湾の下記4大学の学生の作文564編(75人分)及び対話60人分を文字起こしした物(テープ約4時間分)、合計1611例の分析結果である。

- A. 私立文化大学日文科4年 テーマ「結婚」1人4分程度の対話60人分
B. 国立清華大学・選修課程(初級日本語修了程度)作文 28人 342編
C. 国立政治大学日文組3年 作文 28人 107編
D. 私立輔仁大学夜間部日文科4年 作文 19人 115編

また、今回は動詞の肯定形を中心に考え、否定形、形容詞、「～に関して」「～に従って」等の助詞相当語、逆接や結果の意味の「て」は扱わない。

2. 「て」の用法と性格

2-1 「て」の用法の連続性

誤用を論じる前に、「て」の意味を概観し基本的性格を押さえておこう。

①動作の並列：思いつくまま動作を列挙したもの。前項・後項とも意志的動作か、前項・後項とも無意志的動作。「そして」で言い換え可能。

(3)もし1億円あったら、家を建てて車を買って外国旅行をする。

(4)夏休みは、富士山に登って、アルバイトをした。(アルク、1987)

①の意味はもともと前項動作の結果が後項動作に影響しない場合に成立する。(4)の場合は、アルバイトを富士山でしたのか別の場所でしたのか不明確である。従って、前項の動作と後項の動作が内容的に関連しやすく前項の動作の結果が残りやすい場合は、②になる。

②継起(順次動作)：①の二つ以上の動作を、同一主体に於いて時間の流れに従って並べたもの。前項・後項とも意志的動作か、前項・後項とも無意志的動作。「それから」「そのあと」で言い換え可能

(5)朝起きて、顔を洗って、ご飯を食べて、学校へ行った。

(6)富士山に登って、みんなで写真をとった。

いずれも前項の動作の結果が後項に残り、常識的には順序は不可逆的であるから、③に連続している。

- ③動作の側面：同一主体の同一時間に於ける動作を、意味の面で主と従に位置付けたもの。前項の動作の結果が残っている状態に於いて後項の動作が展開する。従って、前項は「動作性瞬間動詞」または反復性の動詞。また前項動作が後項動作を修飾する性格を持つ。「ながら」で言い換え可能である。

(7)手を振って、友達を見送った。

しかしこれは、「手を振ることによって見送った」という手段にも解せる。前項が後項の修飾的性質を持つことから、④へと連続する。

- ④手段：③に於いて前項がなければ後項が成り立たないという関係。前項・後項とも意志的動作。「そうすることによって」で言い換え可能である。

(8)一生懸命勉強して、いい大学に入ろう。(アルク、1987)

(9)彼は、屋上から飛び降りて死んだ。(森田、1980)

前項の動作が後項の動作に連続するという関係から、前項が後項の原因という関係とも捉えられ、⑤の因果関係の発想につながる。

- ⑤原因・理由：④に於いて後項に意志性の認められないもの。従って、後項は無意志的動作。「ので」「から」で言い換えられる。

(10)一生懸命勉強して、いい大学に入ることができた。(アルク、1987)

(11)彼は、屋上から落ちて死んだ。(森田、1980)

従って、以上①～⑤の相互関係は以下ようになる。

- (ア)①から④までは同一主体に於いて発生する二つの動作・作用であり前項と後項は同一の動作主である。

(イ)①②は等位構造をなすが、③④⑤は「て」節を従属節とする従属構造。

(ウ)①は並行動作であるが、②③④⑤は用法が連続していくにつれて前項と後項の関係が論理的になっていくのが注目される。

2-2 「て」の用法の基本

しかし、「て」そのものが①～⑤の機能を持っているわけではなく、「て」は『ただ言い切らずに次の事柄へ続く役目を果たすにすぎない』(国際交流

基金, 1978) のだから, 上記のいろいろな用法も前後の関係から帰納的に解釈されるにすぎない。その意味で「て」はいわば無色透明である。但し, ②~⑤を通して共通なのは「継起」の性格であろう。用法を論理性が強くなるに従って並べた場合, より複雑なものほどそれ以前のより単純なものとの契機を順次含んでいるものであるから, ②から⑤までの「て」の用法は「継起」が必ず含まれていると言える。資料2は上記4大学の作例中の「て」の使用状況を調べたものであるが, 「継起」についての誤りは皆無であった。また資料1は正しく使っている例の内訳であるが, A~Dのどのグループでもやはり「継起」が圧倒的に多く, この用法は学生のレベルを問わず, また書き言葉(A)か話し言葉(B, C, D)かを問わず定着していることがわかる。これは, 「て」における「継起」の性格がいかに基本的かということを示すものであろう。それだからこそ, さらにまた「継起」の機能を軸として前項・後項の微妙な違いにより「て」の用法の交替があちこちで発生するのであり, このことも「て」の誤用を論ずる時に見逃せないのである。

資料1 正しく使われている「て」の内訳 ()内は%

	A	B	C	D	合計
継起	24(66.7)	266(64.1)	216(48.8)	245(57.9)	751(56.81)
動作の側面	6(16.7)	35(8.4)	115(26.0)	85(20.1)	241(18.23)
原因・理由	3(8.3)	63(15.2)	91(20.5)	60(14.2)	217(16.41)
手段	1(2.8)	30(7.2)	24(5.4)	29(6.9)	84(6.35)
対比	0(0.0)	19(4.6)	2(0.5)	3(0.7)	24(1.82)
逆接	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.2)	1(0.08)
結果	0(0.0)	2(0.5)	0(0.0)	0(0.0)	2(0.15)
その他	2(5.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(0.15)
合計	36(100.1)	415(100.0)	443(101.2)	423(100.0)	1322(100.0)

3. 実際の誤用例から

3-1 誤用の分類

誤用文289例を分析すると, 次のように分類される。(それぞれの例は字数の制約上, 数を限った。)

a. 「て」と似た役割を持つ接続語との混同による誤り

(a)並列の機能を持つ接続語との混同

資料2 グループ別誤用の割合 ()内は%

	A	B	C	D	合計
⑤「て」→「と」(発見)	3(11.5)	15(11.1)	22(44.0)	15(19.2)	55(19.0)
⑧「て」→「ので」「から」(理由)	3(11.5)	26(19.3)	12(24.0)	12(15.4)	53(18.3)
⑩「て」→「こと」等(形式名詞)	3(11.5)	14(10.4)	1(2.0)	4(5.1)	22(7.6)
⑬「て」→「が」(逆接・前置)	3(11.5)	9(6.7)	0(0.0)	3(3.8)	15(5.2)
⑬「て」→「のに」等(逆接)	1(3.8)	14(10.4)	2(4.0)	3(3.8)	20(6.9)
③「て」→「し」(列挙)	1(3.8)	22(16.3)	0(0.0)	4(5.1)	27(9.3)
⑬「て」→「。」(不要な接続)	5(19.2)	19(14.1)	8(16.0)	10(12.8)	42(14.5)
⑨「て」→「たら」「ば」等(条件)	1(3.8)	9(6.7)	0(0.0)	1(1.3)	11(3.8)
⑥⑦「て」→「ながら」(動作の側面)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(3.8)	3(1.0)
①②④⑩⑬その他(極少例)	3(11.5)	7(5.2)	5(10.0)	20(25.6)	35(12.1)
⑬「て」→「て」(「て」の非用)	3(11.5)	0(0.0)	0(0.0)	3(3.8)	6(2.1)
合計	26(99.6)	135(100.2)	50(100.0)	78(99.7)	289(99.8)

①「て」と連用中止形 ②「て」と「たり」 ③「て」と「し」

【③の誤用例】「ほかの子供はピアノを弾いて、絵を書いて、いろいろなことを習って、自分の子供は何も習わないと競争の相手に勝つことができないと思っている。」(D「森林小学校」)「て」→「たり」

(b)継起の機能を持つ接続助詞についての混同

④「て」と「てから」 ⑤「て」と「と」(発見)

【⑤の誤用例】「今の現象を見て、夫婦の関係に、ただふたつがあります。」(A)「て」→「と」

(c)動作の側面(同時進行)の機能を持つ接続助詞との混同

⑥「て」と「ながら」

【⑥の誤用例】「でも、その男はスターの写真を見てガールフレンドに愛することばを言います。」(D「漫画」)「て」→「ながら」

(d)手段の役割についての混同

⑦「ながら」と「て」

【⑦の誤用例】「私は、日本語は、テレビを見ながら勉強しました。」

(B「なぜ日本語を学ぶか」)「ながら」→「て」

(e)原因・理由の機能を持つ接続助詞との混同

⑧「て」と「ので」「から」 (【⑧の誤用例】は3-2で詳説)

b. 「て」に本来課せられ得ない接続機能を課した誤り

(a) 文型の未習熟のために簡便な「て」にとびついた例

- ⑨「て」と条件の接続助詞「と」「ば」「たら」「なら」との混同
⑩「て」節と「もの」「こと」「の」等の形式名詞の作る節との混同
⑪「て」を用いて正しくない副詞節を作った誤り ⑫引用文の誤り
⑬「て」と「ても」「のに」等逆接の接続助詞との混同
【⑨の誤用例】「ですから私は長い休暇があって、漫画を見たいです。」
(B「もし休暇があったら」)「て」→「たら」

【⑩の誤用例】「結婚したらDINKSになると思うは、子供に束縛されて希望しないからです。」(B「結婚」)「て」→「ことを」

(b) 「文の中止・次の文への接続」という「て」の機能を濫用した誤り

- ⑭「て」と「が」(前置, 逆接) ⑮二つの文を不要につなげた誤り
【⑭の誤用例】「皆はわかったはずだと思って、学生には一番大切なのは、知識を習うということだ。」(B「アルバイト」)「て」→「が」

c. ⑯「て」の非用

【⑯の誤用例】「うしろのおじいさんは見た『親切が仇になるってやつだな』と言いました。」(C「サザエさん」)「た」→「て」

それぞれの種類の数と比率は資料2で示したが、一覧してわかるように、作文では、初級のBグループは誤用の種類が比較的分散しているのに対し、構文能力がある程度安定しているC、Dグループ(3、4年生)では、⑤発見の「と」、及び、⑧原因・理由の「て」、に誤用が集中しており、⑤と⑧がそれだけ習得困難な用法だと言える。いずれも検討の必要な問題であるが、今回はそのうちの、a. (e)⑧の「原因・理由」についての誤用を代表例として考察を進めていく。この種の誤用が先に述べた、(1)「て」の簡便性、(2)「て」の「継起」としての基本機能、(3)文脈等による「て」の意味連続性、の3つの性質を最もよく代表していると思うからである。(なお誤用例中の「て」以外の誤りについては、訂正を加えず原文のままとした。)

3-2 原因・理由としての「て」の誤用例

【誤用例1】

(12a)はい、実はお見合いはおもしろくて、機会があったら、あるいはほんとに(結婚相手を)見つけないと、試してみよう。(A)

後項が意志的動作だと、「て」は使えない。『この中止形の「～て」自身は、テンスは示さない。それは、後続の動詞におおさっている』(国際交流

基金, 1978) のであるから, もし後項を意志のモードにすれば, 前項も意志のモードになる。そうすると, この例では「おもしろい」が意志的動作になる, という矛盾が起こってしまう。それ故, 「て」でなく「ので」「から」を用いる。

(12b) はい, 実はお見合いはおもしろいから, 機会があったら, あるいはほんとに(結婚相手を)見つけないと, 試してみよう。(○)

【誤用例 2】

(13a) 去年の四月の頃, 私はうれしくて, 救国団と日本亜細亜航空と日華青少年交流協会と日本交流協会など一緒に開催された日本大学生訪華研修団を接待しました。(D「身近なことを批判する」)

「て」の作る原因・結果の文の中でも, 後項が話し手の感情を直接示す場合は, 「ので」「から」で代用しない方がいいようである。

(14a) 雨ばかり降って, いやですね。

(15a) 合格して, よかった。

これらを「ので」「から」を使って言い換えると,

(14b) 雨ばかり降るから, いやですね。

(15b) 合格したので, よかった。

などとなり, 何となく理屈っぽくなって直接的な感情が伝わってこない。これは, 「て」が『論理性に乏しく情的な表現』(森田, 1980) であることに起因するのだろう。後項の結果が『止むを得ず引き起こされたのだ』という「て」の受動性が, かえって感情の表現には効果的に働いているようだ。

しかし中国語の場合は, 例えば「あなたに会えてうれしいです。」を「我很高興遇到你。」と言うように, 引き起こされた結果の感情を冒頭に位置する構文になる。そこで, 【誤用例 2】のように「うれしい」を冒頭に配置させ, しかも接続の用途として簡便な「て」を用いてしまう, という現象が起こる。これは, 次のように改められなければならない。

(13b) 去年の四月の頃, 私は救国団と日本亜細亜航空と日華青少年交流協会と日本交流協会など一緒に開催された日本大学生訪華研修団を接待してうれしかったです。

3-1で挙げた「⑫引用文の誤り」も, これと同質の発想によるものだ。

(16a) 実は私の先輩はよく私に話して, 実はもともとうちの学校の大学院を受けました。(A)

これは「～と言いました」「～と考えます」「～と感じます」等の引用の部分で、最初に中国語よろしく「他説」「我想」「我觉得」等を持ってきてしまい、さらに「て」の簡便性に依拠して接続してしまった例である。

(17)私は考えて、学生の義務は勉強することです。(×)

(18)母は私に言って、結婚は大切なことだから慎重にした方がいい。(×)

この種の誤用は特に話し言葉に多いが、但し「～と思います」だけは引用文の例としてよく挙げられるせいか、比較的定着していてあまり誤用例は見られないようである。(16a)の訂正文は、

(16b) 実は私の先輩はよく私に、実はもともとはうちの大学院を受けた、と話しました。(○)

【誤用例3】

(19a) お医者さんは「なーに、たんなる胃炎です」と言って、皆は安心した。(C「意地悪婆さん」)⁽¹⁾

原因・理由は「継起」や「手段」をも契機として含んでいるので、誤用文の訂正もさまざまな角度から見なくてはならない。

森田(1980)の言うように、「て」の原因性とは『前項が成立した結果、話し手の意志とは関わりなく後項の事態がやむをえず引き起こされる』というものである。従って、結果が意図されたものであれば「手段」になり、この場合前項・後項ともに意志的動作である。結果が意図されたものでなければ「原因・理由」となり、後項は必ず無意志的動作になる。従って、この文によって「手段」を示そうとするなら、後項も意志的動作にする。

(19a) お医者さんは「なーに、たんなる胃炎です」と言って、皆を安心させた。(○)

では、この文によって原因・理由を示すにはどうしたらよいか。

ここで考察したいのは、「前項動作の受け手の視点」と、「前項事態の原因性の強さ」という二つの問題である。以下、これを分析する。

まず、主格の問題がある。この【誤用例3】は、動作主の助詞に前項・後項とも「ハ」が使われているので等位構造になり、これでは「継起」或いは「対比」の意味に転化してしまう。なぜなら、次の例を参照されたい。

(20)彼は入院してびっくりした。(継起)

(21)彼が入院してびっくりした。(原因・理由)

(20)の文で「びっくりした」のは「彼」だが、(21)で「びっくりした」のは「話し手」である。それ故【誤用例3】で主語を統一しないまま前項を後

項の従属節にするなら、まず「お医者さんは」をガ格にする必要がある。

さらに、前項・後項の因果関係を強めるという方法を考える。

前項・後項とも無意志的動作の場合から、順を追って考察しよう。

(22a) 風が吹いて、木が倒れた。

これは「風が吹いたあとで、木が倒れた」という「継起」にも解釈できるが、原因性をはっきりさせなければ、次のようにする。

(22b) 風に吹かれて、木が倒れた。

これは、前項「風が吹く」という作用が、その結果を受ける後項の動作主である「木」の視点から捉え直されているからだと思われる。

次に、前項が意志的動作の場合は、事情はやや複雑である。

(23a) 母親は、息子が反抗して困っている。

後項が感情を示す述語の場合は、動作主または感情主が一致しなくても、【誤用例2】で述べたように、原因性が比較的発生しやすいようである。また、「息子が反抗する」というのは母親の視点であり、息子としては筋の通った行為をしているつもりかもしれない。このように、後項が感情の述語の場合は後項の感情主の視点も入りやすく、また後項の感情主の視点が入る方が原因性をはっきりする。その証拠に、前項を受け身にすれば、

(23b) 母親は、息子に反抗されて困っている。

母親の視点は定まり、文はさらに安定する。それ故、【誤用例3】も、
(19c) お医者さんに「なーに、たんなる胃炎です」と言われて、皆は安心した。(○)

以上、原因性をはっきりさせた訂正文は、動作の受け手の視点が入った文であり、それは前項・後項の動作主または感情主を一致させることによって確保されることがわかる。

ところが、原因性が動作主如何にはかかわらない次のような例もある。前述のように(19a)の前項をガ格にした文、

(19a) お医者さんが「なーに、たんなる胃炎です」と言って、皆は安心した。(×)

は正しくないのに、

(24a) お医者さんが来て、みんな安心した。(○)

という文は、動作主の不一致にもかかわらず正しい。さらにこの文の動作「来る」には動作の受け手の視点が入っているとは言えないばかりか、

(24b) お医者さんに来られて、みんな安心した。(×)

と前項を受け身にするとかえって変な文になる。これは受け身が主に迷惑を意味することに起因している。それならば後項の感情を迷惑のものに変えて

(25a) あんたに来られて、みんな迷惑してるよ。(○)

とすれば当然正しいわけだが、しかし受け身の部分を削除して

(25b) あんたが来て、みんな迷惑してるよ。(○)

としても相変わらず正しい。

ここまで考察すると、二つの事態「お医者さんが～と言う」と「お医者さんが来る」との差異を考えざるを得ない。「お医者さんが来る」は「お医者さんが～と言う」よりも、後項事態との関連を予想させやすいようだ。「お医者さんが～と言う」はその言表の内容がいかなるものであるか不定であるため、その性質も中性的で後項の事態も引き起こしにくいのだろう。これに対して「お医者さんが来た」は、後項の「みんな安心した」という事態（あるいは「安心した」という感情）を引き起こしやすく、そのため「お医者さんが～と言う」よりも因果結合が現われやすいと言える。このように、前項の事態には原因性の強いものと弱いものがあるようだ⁽²⁾。そのため「て」の因果関係を決定するには、前項の事態そのものの性質も考えなくてはならないことになる。このような原因性の弱い事態「お医者さんが～と言う」を前項に置いた場合、後項との因果関係を強める方途としては、前に述べたような「結果の受け手」の視点がさらに重要になってくる。

前項と後項の動作主または感情主を一致させないまま「みんな」の喜びの感情の視点を強めるには、(24)も(19)も、次のようにするのがよいだろう。

(24c) お医者さんが来てくれて、みんな安心した。(○)

(19d) お医者さんが「なーに、たんなる胃炎です」と言ってくれて、皆は安心した。(○)

このように、「て」によって「原因・理由」を示そうとする時には、

(ア)前項動作・事態の性質は原因性の強いものとそうでないものがあり、原因性の強い動作・事態の場合は、そのまま「て」形にして後項に接続すれば「原因・理由」の性質は保たれる。

(イ)前項動作・事態が原因性の弱いものである場合は、前項動作・事態の原因性の受け手の視点を構文に組み込む必要がある。

といった判断が必要なようだ。しかし、このような微妙な判断を学習者

資料3 テーマ別「て」の現われ方—輔仁大学夜間部4年生の作文より

A類：叙述的な文 「お爺さんと猿」「4コマ漫画の説明」「中国の故事」

B類：叙述的+論理的な文 「身のまわりの事を批判する」

C類：論理的な文 「～は是か非か(2回)」「資料を見て意見を述べる」

	正しい文	誤用文	全体	誤用率
A	302(58.9%)	46(43.4%)	348(56.2%)	13.2%
B	(45×3)135(26.3%)	(14×3)42(39.6%)	(59×3)177(28.6%)	23.7%
C	76(14.8%)	18(17.0%)	94(15.2%)	19.1%
計	513(100.0%)	106(100.0%)	619(100.0%)	17.1%

に求めるのは無理であろう。作文指導の便宜としては、原因性をはっきりさせたいのなら、制約の少ない「ので」「から」を使わせる方が安全であろう。

(19e) お医者さんが「な—に、たんなる胃炎です」と言ったので、皆は安心した。(○)

4. まとめ

「て」の本来の機能は「文の中止」であり、もともと「原因・理由」の機能はない。従って「て」にその役割を課した場合は、「ので」「から」よりも論理性は低くなる。上の資料3は輔仁大学夜間部4年生の作文におけるテーマ別の「て」の使用頻度である⁽³⁾。ここで「て」が叙述文に最も多く用いられ、論理的な文になるほど少なくなるという結果が出ているのは、「て」の論理性が低いことの一つの現われと言えよう。

それ故、このような「て」に「原因・理由」という論理的な役割を課するためには、次の諸制約が必要である。

- (1)後項の動詞は意志を示す文末で結ぶことはできない(【誤用例1】)。
- (2)(1)を満たす場合は、①前項・後項の動作主が一致しているか、②前項動作・事態が因果性の強いものであるか、③結果の受け手の視点が前項の構文に組み込まれているか、いずれかでなければならない(【誤用例3】)。
- (3)但し、後項に話し手(=動作主)の感情を直接示す述語がある場合は、「ので」「から」より「て」を使う方が効果がある(【誤用例2】)。

これらの制約下で初めて、「て」は原因性を帯びることができるのである。

注

- (1) 4コマ漫画の展開を説明叙述させた作文。出典は「サザエさん」等。
- (2) 前項事態がいかなる場合に後項事態との因果結合を引き起こしやすいかということについては、①前項の動作・事態の諸条件、②後項の動作・事態の諸条件、を今後詳しく検討するつもりである。今回は①について、前項事態のプラス因果性とマイナス因果性を次のように考える。

A : a. 妻が会社をやめて、彼はほっとした。(○)

b. 妻が家事をして、彼はほっとした。(×)

B : a. 彼は、妻が死んで、悲しんでいる。(○)

b. 彼は、妻が先立って、悲しんでいる。(×)

上のA、B二種類の例のうち、aタイプの事象をプラス因果性とし、bタイプの事象をマイナス因果性とする。むろんaとbの中間(例えば、A「妻が家事を始めて、彼はほっとした。」(△)など)もあるのだが、どのような条件の下でa或いはbに近づくか、ということは、今後の研究課題としたい。

- (3) 資料4のA類とC類の作文課題は3回、B類の課題は1回だけだったので、B類を3倍にすることによってA、B、Cを同数とみなした。

参考文献

- (1) 教師用日本語教育ハンドブック(1978)『文法I・助詞の諸問題』国際交流基金
- (2) 白川博之(1990)『「テ形」による言いさしの文について』広島大学日本語教育学科紀要1
- (3) 宗田正巳(1990)『継起表現「P—てQ」と因果関係』日本語・日本文化17号
- (4) NAFL日本語教師養成通信講座(1987)『日本語の文法(3)』アルク
- (5) 久野暲(1973)『日本文法研究』大修館
- (6) 南不二男(1947)『現代日本語の構造』大修館
- (7) 森田良行(1980)『基礎日本語』角川書店

(中華民国・国立政治大学東語系日本語組専任講師)